

新春法話 「普通がいいな」

あけましておめでとうございます。

本年もようこそ、お地藏さんのお寺正光寺 初詣にお参りくださいました。

近年初詣では三が日で参拝者が千人を超え、秋の七五三時期には百人を超える幼子たちがお参りにきており賑わいを見せております。これも地域の人々の信仰の支えがあつてのものであり、ありがたいことだと思っております。

今思うと初詣や七五三の行事を始めたころは、違和感を覚える人がおりました。お寺では故人やご先祖様の供養する場所として理解されている方が一般的ですが、弘法大師空海が開いた真言宗の教えでは、供養することも大事だが、同じように今を生きる私たちの祈りと安心を求める事も大事と考えます。祈りと安心を求める行事が初詣や七五三などで、決して特別な行事を行っているわけではなく、真言宗としてごくあたりまえの行事を行っています。年を経る中で今では普通にお参りいただくようになりました。

今年の新春法話のテーマは「普通がいいな」です。普通という言葉を私たちは日常生活のなかでよく使う言葉です。でも「普通ってなに？」と考えてみると、定義しがたいところがあります。字義で見ると普通は「普く通じる」となり、意味として「おおむね」「ごくありふれた」「あたりまえ」「平凡」「いつも」と同義語があげられます。反対の言葉には「特異」「特別」があります。

人生を達観したひとに「人生は普通に生きられれば良い」と言う方がおられますが、この言葉が言わんとしていることは決してこの世に生まれていきなり普通に生きるというわけではありません。人は物心がつき欲が芽生え様々な体験をしていく中で、成功して得意げになったり失敗して挫折したり、出会いを喜んだり別れを悲しんだり、笑ったり腹をたてたり、意固地になったり寛容になったりなどして心のありようの両極を知っていきます。そしてその気持ちはどちらかに極端であれば良くも悪くも自己を苦しめる結果をもたらすことを 年を重ねていく中で反省しながら理解していきます。心底理解したとき、これからは極端の気持ちはならないように気を付け、ほどほどな気持ちを持つことを心がけるようになります。つまり「ほどほど」というところが「普通」ということではないでしょうか。

では「ほどほどの気持ち」を持つためにはどうしたらよいのでしょうか。仏教では執着を捨てよと説きます。物事こたわるなということです。しかしこたわるなということを考えてしまうとこたえてこたわらないということにこたわってしまうので矛盾してしまいます。ですから難しいところではあります。が、「こたわらない」を「特に何も考えない」と考えてみてはどうでしょうか。こたわらずに生きる。物事に深く考えず、ありのままを受けとめるようになれば、自然と人は「ほどほどの気持ち」をもつことができると思います。

明治時代 京都女子大学の創始者、甲斐和理子の歌に

「岩もあり 木の根あれども さらさらと たださらさらと 水は流るる。」(水は高きところから低いところにただ普通に流れる。)があります。

「普通がいいな」 私たちの人生 毎日が特別なことがあるわけではなく、ごくありふれた日常生活の連続で成り立ち、生から死へと生きていきます。先ほどの歌の水のごとく生きることができれば、真の幸せに近づくことができるはずです。

皆様のこの一年のご多幸を祈念し、新春の法話とさせていただきます。

平成三十年 戊戌 元旦

延命山 正光寺 住職 高野隆 晃